龍神たちの晩餐　～青の龍の物語～

伊塚カナウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍神たちの晩餐　～青の龍の物語～

【Ｎコード】
Ｎ４２２９Ｔ

【作者名】
伊塚カナウ

【あらすじ】
ここは崖のそばにある古ぼけた神殿。
青の龍の祭りで披露する舞いを練習していた少女は、
見知らぬ国の紋章の入ったマントを身につけた青年と出会う。
青年は少女に告げる。
「神は人間を喰うなんて真似はしない。どうか俺を信じてくれ」
九つの龍の伝説が残る世界を舞台にした冒険ファンタジー。

この物語があなたを楽しませるものでありますように。

第４回ルルルカップ落選作。
テーマは『恋の落とし穴』です。

※なお、当作品は他のサイトでも公開されています。
　軽微な修正による多少の差異はありますが同一作品ですので、ご了承くださいませ。

神殿での邂逅（前書き）

この物語は、現在連載中の作品「龍神たちの晩餐」の第二章ダンスと連動しております。
よろしければそちらもご覧くださいませ。
⇒ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１６０７ｔ／

神殿での邂逅

視線を感じて、少女は舞うのをやめた。おもむろに背後を見やると、そこには見たことのない衣装を着た青年が立っていた。

艶のない真っ黒な髪と燃えるような赤い瞳を持つ精悍な顔立ちの青年だ。どこかの国のものらしい紋章が入ったマント、魔力増幅用の媒体になっているだろうと想像できる耳飾、魔導師であることを示す帽子、手袋、特殊な古代文字によって細かに刺繍された前掛けを身につけている。清潔感のあるきちんとした格好だ。とはいえ、よく見ればあちらこちらに傷があるのがわかり、だいぶ使い込まれていることに気付ける。

青年がこちらを見つめたまま惚けた顔をしているのが目に入って、少女は自分の格好を思い出した。

（や、やだあたしったらっ……！）

握っていた透けるほどに薄い羽衣で咄嗟に身を隠してみるものの、柔らかな日差しに照らされる成長しきっていない幼い裸身を覆い隠せるものではない。少女は全身を真っ赤にして青年に背を向けて訊ねる。

「こ……ここは一般の方は立ち入り禁止のはずなんですけど……？」

ここは崖のそばにある古ぼけた神殿。エラザ共和国の首都ザフィリで開かれる青龍祭が行われている間、その祭りの主役である巫女が軟禁されている場所である。青龍祭の関係者以外は立ち入り禁止のはずであり、さらに付け加えるならば、巫女に選ばれたこの少女がいる狭い庭は、緊急事態を除けば彼女以外の出入りができないようになっていると聞かされていた。

（ってか、どうして男がこんなところに?!　いや、そうじゃなくて、ううん、そこも大事だけど、裸、ばっちり見られちゃってない!?　祭りの前に見られて良いわけ?　あ、まずいよね?　まずいんじゃない?　神聖性を損ねて儀式が失敗とか、ものすっごく困る

んですけどっ！？　この日のためにあたし、今日までの十六年間、この町から出られないでいたはずなんだけどっ！？　こんなことで儀式が失敗したら、あたしの一族、消されるんじゃないのっ！？）

この事態が悪いことにしか思えない。少女の顔から血の気が引いていく。

（あぁっ、ごめんなさい、お父様、お母様、お祖父様、お祖母様、お兄様……。ルルディは残念な子なんです。うっかり龍神様の生け贄に選ばれちゃってごめんなさいっ。あたしが選ばれてしまってごめんなさいっ）

すっかり気が動転してしまって、少女は頭の中であれこれと忙しく考える。頭を抱えてひたすら脳内で誰かに謝り続けている彼女の肩に、そっと手が載せられた。びくっと身体を震わせ、涙さえ浮かぶその瞳で背後に立つ人物を見つめる。

「――えっと……聞いてました？　俺の話」

「……はい？」

青年の困り顔が目に入る。聞いていたかと質問されたが、何も耳に入っていなかったので少女はきょとんとして返すよりほかはない。

（本当に何にも聞いてなかった……あたし、自分で質問投げていなかったっけ？）

冷静さを取り戻し、そして自分の薄い胸元を少女は隠す。青年が視線を外しているのがわかったが、それでも気恥ずかしい。

もじもじとしている様子に青年は気付いたらしい。彼は羽織っていたマントを取り外してふわりと少女にかけた。頭一つ分ほど背の高い青年が身につけていたものなので、身体を覆い隠した上で足元に余った布が広がる。彼の温もりが残っているのと、かすかに汗や埃の混じった特有の匂いがして、少女は心音が跳ね上がるのを感じた。

（変な感じ……見られてしまったときもびっくりしてドキドキしたけど、これはなんか違うみたいな……）

しっかりと全身を覆って、少女は改めて青年の顔を見上げた。申

し訳なさそうな顔をしている。
「――まずは見てしまったことを詫びるよ」
（わざとではない……ま、そうよね）
正直に謝っているのはその顔を見ればすぐにわかった。悪気があってここを覗いたわけではない。何らかの偶然でここを通りかかり、青龍祭で披露することになっている舞の練習風景を見てしまったのだろう。
この世界を創造した精神から分かれたとされる九つの龍の一体、青の龍に捧げられる鎮魂と浄化の舞。その舞に衣裳はなく、装飾品としての羽衣と金の環を腕と足につけるだけの姿で行われるため、誰に会うこともないこの庭を利用し正装で舞の練習をしていたのであるが――。
（……って）
納得し、彼を許しかけたのも束の間。少女は別の理由で顔を真っ赤にし、青年の胸ぐらを掴んだ。
「あ、謝られてでもですねっ！　こっちはまだ男に見られたことのなかった裸を目撃されちゃったんですよっ!?　どうしてくれるんですかっ!?」
「だ、だからそれは悪かったって……って、泣くなっ。泣くほどのことなのかっ!?」
青年のうろたえる声。既に少女の視界はぐにゃりと歪んでいた。
「泣きますよっ！　そりゃ泣きますよっ!!　もし、これが原因で儀式が失敗しちゃったらどうしてくれるんですかっ！　責任取ってくれるんですかっ!?　この町の――いえ、この国の命運がかかっているんですよ!」
もしも失敗したら――少女はその状況を想像して、身体をわずかに震わせた。
（あたしの命だけじゃなく、一族根絶やしにされてもおかしくない……）
背筋を悪寒が走り、少女は青年から手を離して自分の肩を抱く。

震え始めた身体は落ち着かせようと念じても止まらない。腕と足首につけた金の環が触れ合って、特有の甲高い音を出す。

（こんなことで、あたしの努力や我慢が踏みにじられるだなんて……絶対に嫌っ……）

悔しい。どうして自分ばかりがこんな目に遭わされるのだと恨み言を呟きたくなる。青年が彼女の六つ離れた兄の年齢に近そうなこともあって、余計につらかった事を思い出すらしかった。

（お兄様……お兄様が青の龍に選ばれていれば、つつがなく儀式を終えることができたでしょうに……せめて、お兄様があたしのそばにいてくれたら……）

二十歳を超え、この町を出て行った愛すべき兄の姿が青年に重なる。ここにいない人物を想いすがりつきたくなるほどに、少女の心は弱っていた。

「――落ち着けよ」

マントを挟んで感じられる温もり。自分が青年に抱き締められているということを、少女はやっと認識した。

（不思議だな……どうして安心できるんだろう……）

青年の温もりに包まれていると、初めて会った人物のはずなのにもっと昔から知っていたような気がしてくる。この町――正確にはこの神殿の周辺しか知らないこの少女の記憶に、彼のような外見を持った人物は登場しない。そうだと理解していながらも、どこかでこの青年とのつながりを感じずにはいられなかった。

（悪い人ではないんだろうな……）

身体の震えが収まってきた。カチカチと鳴っていた金属音はいつの間にか止んでいて、少女は青年に身を任せる。

すると彼は少女の耳元で囁いた。

「儀式は必ず成功する。いや、成功させる。俺はそのためにここに来たんだからな」

「……え？」

少女が顔を上げ、青年の顔を覗く。彼の炎のような真っ赤な瞳に

力が増した。
「神は人間を喰うなんて真似はしない。どうか俺を信じてくれ」
（――この人、何を言って……）
彼女に向けられる優しい微笑み。しかし少女は戸惑うばかりだ。
なぜなら、少女はこの儀式の最後、生け贄としてその命を龍神に捧げることになっていたからだ。
（龍神様は、生け贄を受けいれてはくれないの……？）
返事をできず、抱き締められたまま彼の顔をじっと見つめ続ける。
真面目にそう告げているらしいことは口振りや顔からわかるのだが、それを了承して頷くことができるかどうかは別問題だ。
（信じるって……何を？）
そうこうしているうちに、騒ぎを誰かが聞きつけたらしい。バタバタという足音が近付いてきて、それが止んだ。
「まずっ……」
事態が変わったことに青年は気がついたらしい。慌てて少女から離れるも、もう遅かった。
「貴様っ！　ここがどういう場所か知っての行いかっ！」
この神殿を警備している女性の兵士たちがあっという間に青年を囲み、持っていた槍を向ける。両手を肩まで挙げて苦笑を浮かべる青年に反抗の意志がないことが伝わったらしい。女性の兵士の一人が青年の前に出ると、魔術錠を取り出して彼の手に掛けた。
「不法侵入、及び、巫女への乱暴の罪で連行する」
「……はい？」
不法侵入の罪は認めたらしかったが、後者の罪に対してはしっくり来なかったらしい。青年はすぐに表情を変えた。
「ら、乱暴って……誤解ですって！　話を聞けば、聞いてくだされればわかりますから、ねっ？　ねっ？」
少女は彼の弁護をしようと口を開きかけたが、別の女兵士に邪魔をされて告げることができない。助けを求める青年と目が合い、少女は申し訳ないと思いながら視線をそらした。

「えっ、ちょっとっ……嘘っ……」

そしてすぐに青年の姿は見えなくなってしまったのだった。

龍神の伝説

時刻は日が傾き始め、空が赤く染まりだす少し前だ。湯浴みを終え、少女は鏡の前に立った。同じ年頃であるはずの世話係の少女たちと比べてまだまだ幼い自分の容姿に、少女は思わずため息をつく。

（うぅ……どうせ見られるなら、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいるメリハリのきいた体型でありたかった……）

青年に見られてしまったことと奉納する舞を踊る際に多くの人に見られることになってしまうのを思い出してしょんぼりとしながら、袖を通す。

祭りが始まってからはずっと神殿に籠って舞の練習に勤しんでいるため、肌を晒している時間が長い。湯浴みのあとと食事のとき以外に服を着ていないことに気付いて、再びため息をついた。

（なんで大勢の人間の前で裸同然の格好で踊らなきゃならないのよ……。巫女の仕事だっていっても、やらされる側のことも考慮して欲しいもんだわ……）

衣服を身につけ、鏡の前に椅子を置くと髪を梳る。空よりも深い青い色の長髪は、まだ水気を多く含んでいて重たい。それでも櫛が途中で引っかかることなくするりと抜ける。

（……今日を入れてあと三日――それがあたしの生きられる時間。明後日の夕刻には、あたしは龍神様の糧になるのか……）

鏡を見るたびに、あと何日生きられるのかを考えてしまう。少女の瞳に宿る青い光、腰まで伸びる青い髪はこの町を守護する青の龍に選ばれし者のみが持つものだからだ。

年頃を迎えて発現するその色に町の人々が歓喜し、選ばれた少年少女はいつだって最初は絶望し、そして運命を受けいれる。

ザフィリで十七年に一度の周期で盛大に行われる青龍祭は、青の龍に選ばれた印を持つ少年少女が主役だ。ひと月に渡る祭りの最終日にその主役が舞を披露し、その命を捧げることで終えるのだった。

エラザ共和国がその名を使うようになるはるか昔から、この土地で行われてきた風習である。

――神は人間を喰うなんて真似はしない。どうか俺を信じてくれ。

不意に日中に出会った青年の言葉を思い出す。

（どういう意味だったのかなぁ、あれは……）

自分を励ますために出任せで告げた台詞ではないとは思えた。しかしその真意を少女は測りかねる。

（もしも、あたしが死ななくてもいいっていう意味だったら、嬉しいんだけどな……）

そんなことを考えて口元を綻ばせ、すぐに悲しい表情を作る。その願いが叶わないことを知っているからだ。たとえ、命を賭す必要がなかったとしても、この町の人間がどう思うかはわからない。今までの仕来りが、結果的に少女を殺す。

（――話を聞きに行ってみようかな……）

揺れていた心が静けさを取り戻す。少女は櫛を置くと手早く髪をまとめて結った。

「よしっ」

決めてしまえば早いものだ。青年が捕まっているだろう場所の見当はついている。少女は誰にも見られていないことを確認すると、抜け道に向かって駆けたのだった。

神殿の地下から行くことのできる狭い部屋の並ぶ場所。そこは龍神様に捧げる供物を保存しておくための倉庫のような役割を果たしており、今は牢屋の代わりに使用されることもあると少女は知っていた。町の中心部から離れた辺鄙な場所で、繁華街に行くにも険しい山道が一本あるだけ、他の道は断崖絶壁というこの立地の都合上、空を飛ぶことができなければ外部に行く手段がないに等しい。この神殿に連れてこられたときに退屈しのぎに散策し、この場所への道を少女は知ったのだった。

「――やっぱりここに閉じ込められていたのね」
狭い部屋の一つ、鉄格子がはめられたその場所に黒髪の青年はいた。少女が一人で現れたことに驚いているらしく、目を丸くしている顔が角灯に照らし出された。
「さっきは説得することができなくてごめんなさい」
「それを言いにわざわざ来てくれたのか？」
「違います」
青年は魔術錠をつけられた状態だった。逃げ出すことができないようにするためだろう、装飾品の一切が没収され、黒っぽい長袖の肌着と身体の線がわかるズボンのみ着用していた。少女が最初に見かけたときの格好とはだいぶ印象が違う。ここまでやるものなのかと思いながら、少女は格子に寄りかかるように腰を下ろす。
「その様子だと、逃がしてくれるつもりもないようだな」
「えぇ。青龍祭が無事に終えられるよう、この町の人々があなたを閉じ込めておくと決めたのなら、あたしはそれを破ろうとは思いません」
「なるほどね。それはある意味、賢明だ」
ここから出してくれと懇願してくるだろうと思っていたのにあっさりと引かれ、少女は目を瞬かせると青年を見やる。
「……もう少し粘るんじゃないかと思っていたのに、意外だわ」
「君が困るのはわかるからね。無理に頼んだりしないよ」
とても落ち着いた声だ。牢に閉じ込められている人間のものとは思えない。侵入を行ったことは事実であり覆すことができないだろうが、少女に乱暴をしたかといえばそうではない。完全な濡れ衣であるのに、青年は憤りを覚えたりしないのだろうか。
「ずいぶんと余裕ですね。怖くはないの？」
「あいにく、拘束されることには慣れているんで」
「えっと……犯罪者さんなの？」
拘束されることに慣れていると聞いて思い浮かんだのはそんなことくらいだった。少女の問いに、青年は肩をすくめる。

「誤解されやすい性格ってだけ。俺は自分に非はないと思っているからさ、相手を信じて静かに待つようにしてる。動けば動くほど、自分が不利になるのを理解しているからね」

（それはずいぶんとツキに見放された人間であること……）

果たしてそれは賢い人間のすべき行動だろうか。少女は疑問に感じながらも、青年を憐れに思った。

「――そういえば、自己紹介がまだだったな。俺はヘイゼル＝ドラッヘ＝バルト。ユライヒト帝国第一都市モルゲンロートの使節団に所属している。ここへは青龍祭の視察で来たんだ」

「モルゲンロート？　モルゲンロートって、裏切りの黒の龍を封印した場所ですよね？」

問いながら、少女は自身の親たちから聞かされてきたこの世界の創造と龍神たちの話を思い出す。

この世界を創造した精神の塊――それはやがて九体の龍となって各地に散らばり、守護するようになった。しかし、平和な時代は続かない。あるとき、黒の龍が人間に愛想を尽かして他の龍達に刃向かった。残る八体の龍は黒の龍の心変わりを沈めようと手を尽くす。それでも完全に封じることはできなかった。力を貯め、破壊の力を司っている黒の龍は圧倒的な強さを持っていたのだ。黒の龍は、封じられずに残った自分の力を新たなる生物に分け与えて地上に放つことにした。それが黒の龍の血縁者と呼ばれる者たちであり、その者に付き従うのが魔物である。安定していた大地は異常を示し、混沌の時代へと移行した――そんな物語が言い伝えとして残っている。

その伝説の中でも、モルゲンロートは重要な地名だ。モルゲンロートは赤の龍の守護範囲であると同時に、完全ではないとはいえ、黒の龍を封印した場所とされている。言い伝えの関連としてモルゲンロート使節団があり、表向きは外交を目的とした国家機関であるが、その主な仕事が各地に散らばり守護する龍の祭りの状況を視察であるということを、少女は兄から聞いていた。

「よく知っているな。最近は祭りのことは知っていても、その背景

にある伝説を知らない人も多いってのに」
「あたしの家、代々青の龍の生け贄を送り出している家柄なんです。――って、あたしも自己紹介していませんでしたね。あたし、ルルディ＝ドラコス＝ロトスって言います。……知ってもらったところで、あたしの命、残り三日も無いですけどね」
名乗って、ルルディは自嘲気味に笑う。今知り合ったところで、その運命が変わることはないだろうという諦めの気持ちがにじみ出ていた。
対して、ヘイゼルの目には輝きが増す。
「やはり君が今期の青の龍の生け贄か。その青い目と髪を見て、もしやと思ったんだが」
「モルゲンロートの使節団にいるだけあって詳しいですね」
青の龍の生け贄を示す印のことを知っているのは地元の人間だけだと思っていたルルディは、素直に感心する。
「確かに使節団では勉強したが、この知識は赤の龍から直接もらったものだ」
さらりと告げられる台詞。ルルディはそのまま聞き流しそうになったが、違和感に気付いてヘイゼルの顔をまじまじと見つめた。
「……赤の龍から？」
その問いに、ヘイゼルはゆっくりと頷いて微笑む。
「え？　ど、どういうことですか？！」
身を乗り出し、真剣に聞こうと耳をそば立てる。彼は真面目な顔をして告げた。
「俺は赤の龍の生け贄だったんだ」
「だった……？　あ、そっか。生け贄って、二十歳を越えた人間は対象外になるんでしたっけ」
ルルディは自分の兄が二十歳になるのを待ってから町を出て行った理由を思い出す。生け贄の印が二十歳を迎える前の少年少女にのみ現れることは、ザフィリの青の龍では一般的に知られていることだが、どうやら他の町を守護している龍の祭りでも同じことらしい。

「その通り。俺は聖都市ルビーン出身で、ルビーンにもこのザフィリと同じように龍神に生け贄を捧げる風習が残っている。――ところで、君は知っているか？　二十歳を迎える前の子は龍の力になるが、それを越えるとその力はすべてその子のものとなる。その身を捧げんとするを拒む者は……神殺しとなる、という言い伝えを」

「えぇ。お祖父様から聞いてます」

だから、神様の言いなりになるしかない、ひとりの犠牲で大勢が助かるのだから、その犠牲を払う我が家系は誉れ高い一族なのだと祖父が言っていたことをルルディは思い出す。

「しかし、本当は違うんだ。伝説は人間たちに意図的に歪められたものなんだよ。真実はこうだ。――龍の手から二十歳になるまで逃れ続けた者は、龍を地上に降ろす力を得ることができる。つまり、龍神がこの世を偵察するための媒体になるということだったんだ」

「媒体に？　えっと……じゃあ、あたしは青の龍神様がこの世界を見るための器になるってことなんですか？」

「飲み込みが早いな」

嬉しそうに告げるヘイゼルに、ルルディは興奮気味に顔を寄せる。

「それが本当ならあたし、生き残らなきゃいけないじゃないですか」

「そういうことだ。――俺はこの事実を他の龍の生け贄に選ばれた人間に伝えるために旅をしている。この代ですべての龍を地上に呼び出し、黒の龍によって衰退しつつあるこの世界を救うのが目標だ。今の時点では俺の中に居るルビーンの赤の龍、モルゲンロートに封じられていた黒の龍、クリステリア王国聖都市エメロードで祭られている緑の龍の三体がこの世界に呼ばれている」

人間嫌いの黒の龍の力がこの世界に及んでいると知って、ルルディは身体をびくりと震わせる。そして不安な気持ちが言葉に変わる。

「すでに黒の龍がこちらにいるんですね……」

「あぁ、そうだ。厄介なことに黒の龍に俺の顔は覚えらちまっていてさ、何かと邪魔されているんだけど」

そこまで言って、ルルディの表情が強張っているのに気付いたら

しい。補足するようにヘイゼルは続ける。
「――あ、今は心配ないぞ。緑の龍が協力してくれたおかげで、しばらくは直接手を出せないだろうからな」
その台詞に多少は安堵できたルルディだったが、別の問題が頭を過ぎる。
「はぁ……しかし、あたし、十六になったばかりなんで、あと四年はその黒の龍の脅威に晒されるってことなんですよね？」
そんな彼女の憂鬱そうな問いに、ヘイゼルは不思議そうな顔をした。
「……十六？」
「はい？　あたし、十六歳ですけど、それが？」
「……て、てっきり十二歳やそこらかと……」
「なっ……！？　ちょっ……失礼なっ！　あたし、確かに背は低いですし、顔も幼いですし、発育も悪いっちゃあ悪いですけど、気にしているのにっ、ひどいっ！　ひどいですっ！」
「しーっ！　静かに。悪かった、悪かったって！　つーか、俺、そこまで言ってねーんだけど」
落ち着けと手をパタパタされて、ルルディは顔を真っ赤にしたまま深呼吸をする。何とか平常心を取り戻し、会話を続行させることにする。
「――は、話戻しますけど、あたし、黒の龍と対抗できる自信、ありませんよ？　武器で戦うことも、魔法を使うこともできない、ごく普通の町娘なんですから」
武術や剣術、魔術や呪術など、習う気になればちょっとしたたしなみ程度に学ぶことは可能だ。そのくらいの情報は首都であるこの町で生活する人間がその気になれば日常的に手に入る環境にある。
しかし、ルルディはそれらを学ぶことを望んでいても、叶うことはなかった。おそらく、生け贄が容易に脱走できないようにするためだろう。ゆえにルルディは他の人間たちが知っているだろうそういった知識に飢えており、二十歳になるまで生け贄に選ばれなかっ

たら町で学び、いつか外の世界で自分の知らないものを見たり触れたりしたいとずっと願っていた。
彼女の意見に、ヘイゼルは返す。
「青の龍の力さえ手に入れば、大丈夫だろう。鎮魂と浄化を司るといわれる青の龍の力だ。身を守る手段くらいあるんじゃないか？」
（む、無責任な……あたし、舞を舞うくらいしか能がないのに……）
気落ちするルルディであったが、そこではたと気付く。
「あれ？　青の龍の力が手に入ればってことでしたけど、どうやって手に入れればいいんですか？」
身体に異変があったとすれば、瞳の色と髪の色が変わってしまったことくらいだ。そのほかの能力についてはなんら変わったようには思えない。ルルディは首をかしげた。
「とても良い質問だ」
ヘイゼルは言って、鉄格子に近づく。そして、真面目な顔で告げた。
「ルルディ、よく聞いて欲しい。――君はこの祭りで舞を踊らねばならない。生け贄の儀式まで全部やり通す必要がある」
（……なんですって？）
言っている意味がわからない。ルルディは血の気が引いていくのを感じる。
（生け贄の儀式をしたら、あたしはやっぱり死んで――）
嫌な光景が脳内に広がっていく。断崖絶壁にある祭壇。そこから身を投げる幼い少女の姿――。
「不安がることはない。俺が手助けしてやる。だから、俺を信じて協力して――」
「信じろって？　冗談じゃない」
ヘイゼルの台詞を遮り、ふんっと鼻で笑い飛ばして続ける。
「あたし、死ぬかもしれないのに、どうしてそんなことができるっていうのよ？！」
「ルルディ？」

ルルディは勢いよく立ち上がり、悲しみに満ちた瞳で彼を見下ろす。

「あたし、舞を踊るのも、生け贄になるのも本当は嫌なのっ！　なによ……あなたに話せば避けることができると思ったのに……期待したあたしが馬鹿だったわっ！」

頭にすっかり血が上っている。身体は恐怖でひんやりとしているのに、思考は完全に沸騰していた。

「あなたには頼りません。――さようなら」

背を向けたまま冷たく言い捨て、ルルディは来た道を駆け出す。話をするだけ無駄だと思い、一刻も早くここを去りたかった。引き止める声が聞こえたような気がしたが、ルルディは一度も振り向かなかった。

不穏な影

瞼に乗せられた青い色。頬を彩る紅色。ふっくらとした唇には真紅が塗られている。鏡に映る自分のそんな顔を見て、ルルディは重いため息をついた。

（ついにこの時が来ちゃったか……）

もう逃げることなど許されない。引き返すことなんて当然できない。ルルディは小さな胸に手を当てる。

（どうか、すべてがうまくいきますように）

今日は青龍祭の最終日。まもなく龍神への奉納の舞が披露され、生け贄の儀式が行われる。

「巫女様。準備はいかがですか？」

部屋の外にいるらしい警備の女兵士の声が聞こえる。

「は、はい。もう出られます」

化粧の間に羽織っていた裾の長い上着を床にするりと落とす。鏡に映る幼い裸身を見て、ルルディはまたため息をついた。

（これで見納めだと思うと、変な涙が出てくるわ……）

どちらかと言うとふくよかな母親の体型を思い浮かべ、自分の姿を重ねる。

（もうちょっと時間があったら、胸くらいはどうにかなったかもしれないのに……青の龍神様が、あたしみたいなのでも受け入れてくれたら良いんだけど）

長いまつげに引っかかっていた涙のしずくを指先で軽く拭う。椅子にかけられていた半透明の薄い羽衣に手を伸ばし――そこで異変が起きた。

ずずずず……。

唸りを伴う低い地響き。何かが崩れるような音がルルディのいる部屋に届く。

「な、何事ですか？」

床に落ちていた上着を取ると、ルルディは扉を開ける。ガラガラという落下音や悲鳴が満ちていた。
「何者かに襲われているようです――巫女様はお逃げください」
槍を構え、すぐにでも戦えるように集中している女兵士がルルディをちらりと見て答える。
ピリピリとした張り詰めた空気。これが人間から発せられているものではないことくらいルルディにもわかった。
（まさか……）
ヘイゼルが告げていたことを思い出す。
黒の龍が邪魔に入る――しばらくは直接手が出せないだろうとは言っていたが、本体が動けなくてもその血縁者たる魔物の脅威は無視できるものではない。
「何をしていますか、ルルディ様。あなた様がここで死なれると困るのです」
ガラガラガラ……。
左手につながる通路の先が崩れ落ちて、瓦礫や埃で煙る。
ぞわっ。
視界が遮られて見えないと言うのに、その先にある異質な気配を肌で感じ取る。思わず自身の肩を抱くと、震えているのがよくわかった。
女兵士はルルディをかばうように通路と少女の間に立つ。
「儀式をつつがなく終えるためにも、今はお逃げくださいませ」
「で、でも、あなたは……？」
自分だけ逃げるとなると、ここを警備している兵士たちはどうするのだろう。ルルディはそんな心配をするが、女兵士は振り向かずに叫んだ。
「あなた様を守るのが我々の仕事。さぁ、早く！」
そして瓦礫で煙る先へと駆け、そこから伸びてきた真っ黒な影に槍を振り下ろした。
「がぁぁぁぁぁっ！」

化け物の咆哮。それが壁を揺らし、埃を散らせる。
ルルディは耳をふさいでそれをやり過ごすと、上着を掴んだまま反対方向へと駆けた。
（どうか、みんな無事でいて――）
さっと上着を羽織り、静かな場所へと向かってひた走る。
カランカランカラン。
足首に付けられた装飾の環がぶつかり合う音が響く。このままでは自分の場所を知らせるようなものだ。
（この衣裳、生け贄を逃がさないための工夫なんだろうけど、完全に仇になっているわね……）
背後に迫る気配。音に気付いてやってきたらしい兵士と合流するたびに、彼らは追ってきた魔物との戦いに入ってくれた。しかし大した時間かぜぎにもならないらしい。どのくらいの数の魔物が襲ってきたのかは不明だが、このままでは逃げ切ることはできないだろう。
（とにかく、逃げなきゃ……）
神殿の入り口から堂々と魔物は現れたらしかった。静かな場所へと向かっていくと、供物庫につながっている抜け道の方で、もはやそこにしか逃げ場はないように見えた。
（あぁ、もうっ、仕方がないわね……）
兵士にこの道のことを知られるのは嫌だったが、選り好みをしている場合ではない。扉を隠すように置かれていた像を脇に寄せ、その細い隙間に身体をねじ込む。
（ヘイゼルさんがいたら、ついでに出してあげよう。ひょっとしたら、あたしを助けてくれるかもしれないし）
この青龍祭の最終日まで同じ場所に閉じ込めているかどうかわからなかったが、このまま放置していては彼の身も危うくなる。解放できれば貴重な戦力になるだろう。彼が戦い慣れしているだろうことは、最初に会ったときに感じたことでもあった。
カランカランカラン……。

ひんやりとした通路。そこは穴を掘って作られたような場所で、密閉性が高いからか音がやたら響く。今のところルルディが入ってきた場所からの音はしないが、気付かれてしまえば追いつかれるのも時間の問題だろう。

（ちょっと待て）

ルルディは走りながらふと思う。

（この通路に来たのはいいけど、行き止まりってことはないわよね？）

この場所が他のどこにつながっているのかを知らないことにルルディはやっと気付く。

（行き止まりだったら……まずくない？）

カランカランカラン……。

重要な事実に直面したものの、もう迷っている場合ではない。行き止まりであれば、そのときにまた考えよう、そう決めてルルディは供物庫にたどり着いた。

（どこだったっけな……）

小さな部屋が並ぶ廊下を小走りで通る。しかしどの部屋にも青年の姿はなかった。

（移動しちゃったのかしら？）

行き止まりになったので、ルルディはすぐに引き返す。その途中で、一つの部屋に違和感を覚えた。

（この部屋……）

記憶を辿り、そこがヘイゼルが閉じ込められていた場所だと確信した。

ルルディは立ち止まり、歪んだ鉄格子に手を触れる。魔法の気配があった。

（自力で脱出したってこと？　でも、この痕跡からすると真新しいような……）

ルルディは魔法を使うことはできなかったが、その気配を感じ取ることは幼い頃からできた。青の龍に捧げられる血筋を示す根拠の

一つでもあり、彼女の家系は誰もが魔力を感知できるのだった。
（ん？　逃げることができるなら、どうして最初からそうしなかったのかしら？　いや、そもそも誤解を解くためにおとなしくしてるって言っていたはずなのに、逃げ出すのも変だし……）
そこまで考えて、ある事実に着目した。ルルディの目に光が差す。
（あっ。今さっき逃げ出したのにあたしとすれ違わなかったってことは、どこかに出口があるってことじゃない？）
ルルディは辺りを見回す。この供物庫につながる反対の道、その先に行ったことはこれまでなかったが、希望があるとすればそこに賭けるしかない。
（行こう。合流できれば、助かるかもしれない。――こんな事態だもの、無理に舞えとは言わないはずだわ）
ヘイゼルを信じ、ルルディは懸命に駆けた。どこに繋がっているか知れない通路の出口に向かって。

祭壇への道

（この道は……）

通路を走りきった先。あっただろう扉は魔法で破壊されており、外から吹き付ける風で髪が流される。ルルディは一歩外に出て、そこがどこなのか思い出した。

（あの部屋が供物庫だったなら、この道に出るのは当然といえば当然よね……）

緊張で喉が渇く。ごくりと唾を飲み込み、石でごつごつとした道の端まで歩いて見下ろす。

靄がかかって地面が見えない切り立った崖。振り向いて見上げれば、容易によじ登ることのできない壁のような斜面が目に入った。

ここは神殿から祭壇に向けて設けられた道。それは崖の縁に沿って作られた険しい場所で、お世辞にも道といえるのかも怪しい悪路だ。儀式の打ち合わせのために彼女は一度訪れたことがある。こんな形で再びやってくるとは、そのときのルルディには思いもしなかったのだが。

（しかし、困ったわね……）

神殿に戻るわけにはいかない。おそらく魔物に襲われて逃げ場はないだろう。祭壇は行き止まりではなかったはずなので、そこに向かうしかない。

（結局、祭壇には行かなきゃいけないのか）

自分の不思議な運命にため息をつきながらも、ルルディは祭壇に向けて走る。神殿よりも祭壇のある場所の方が低い位置にあるため、緩やかな下り坂がひたすら続く。

必死に駆けてきたルルディは、遠くに祭壇が見えてきたところで違和感を覚えた。

（何、この感覚……）

ぞわぞわっと肌を這っていくような不気味な気配。身の危険を感

じて、ルルディは駆けながら背後を見やる。そしてその正体を理解した。

「なっ……」

ルルディは真っ直ぐに進行方向を見据えると、その両手を大きく振って足を動かす。

化け物がそこにいた。大柄な男くらいの背丈はあるだろう真っ黒な影だ。人型をしてはいるが、その輪郭はぼんやりとしていて揺らめいている。頭部らしき場所には巨大な一つ目と、耳まで裂けていると形容するのが相応しいだろう口が、少女を狙うかのように開かれていた。

そんな姿の化け物が一体だけでなく複数、見えるだけで五体はいるのが確認できる。

（あれが神殿を襲撃してきたやつらの正体か……）

見てしまったら恐怖で動けなくなるんじゃないか――そんなことも一瞬思ったルルディだったが、走った状態から、それも坂を下るように移動していたのが良かったのか、足は止まらずに動き続けている。

（逃げ切らないと、このままじゃ殺される……）

祭壇まではこの通りしかなく一本道。右手は谷へと繋がる傾斜のきつい岩肌、左手も登ることは不可能と思える急斜面だ。挟み撃ちにされたらお仕舞いと言える場所に、ルルディは薄ら寒いものを感じる。

（生け贄になりたくないだなんて言っちゃったのが、まずかったのかもしれないわね）

息が切れる。化け物との距離はじわじわ縮みつつあったが、まだ攻撃されるような間合いではない。

（町のみんなは無事かな……）

不安な気持ちが急速に胸に広がる。

その想いが足をもたつかせたようだ。ルルディは地面のくぼみに足を取られて転倒した。

ずざざざっ……。

勢いと傾斜もあってルルディは地面に身体を強かに打ちつけ転がった。柔らかな素肌に無数の傷が生まれ、血で赤く滲む。

（痛いっ……）

足首を捻ることはなかったようだが、派手に転んで体中にできた擦り傷からは痛みが次々と押し寄せる。

（でも、逃げなきゃ……）

この化け物たちは黒の龍の血縁者に付き従う魔物たちなのだろう。生まれてからこれまで魔物に出会うことはなかったが、今対峙しているこの者たちこそがそれであるのだと本能的に感じ取った。

じっとしているわけにもいかず起き上がろうとして、しかし、地面に影が生まれるのを見て横に転がる。

「ちょっ……」

予期せぬ攻撃。

黒い影の手が伸びていた。

地面にその触手のように伸びたそれが突き刺さったかと思うと、瞬時に収縮。次の手をこちらに向かって構えていることが、ルルディが仰向けになったときに視界に飛び込んできた情報だった。

「くっ……」

ぎりっと奥歯に力を入れ、辺りに注意を向ける。投げられるようなものもないし、相手をひきつけておけそうなものも何もない。あるとすれば、壁のように切り立った空に向かう斜面と、転がるというよりも落下するだろうとしか考えられない地面に延びる崖があるだけだ。

（ここが限界みたいね……）

明らかに狙ってきているのがわかり、体勢を立て直そうとするが間に合わない。先頭にいた影の化け物の手が矢のように放たれる。

（殺されるくらいなら、せめて――）

もう逃げ場はない。ルルディは決意すると、影の攻撃を転がることで避けきり、そのまま谷底に向かう斜面へと身体を転がす。

（生け贄の儀式に則って死んでやるわよ――）

吸い込まれるように、ルルディの小さな身体は谷底へと落下していった。

（ここはどこかしら……）

崖から落ちたはずであるのに、不思議と痛みを感じない。それどころか手足の感覚もなかった。

深い闇に閉ざされた空間。そこに立っているでも、横たわっているでもなく、中空に浮かぶような、しいて言うならば水中にいるかのような奇妙な感覚にルルディは襲われた。あまりにも暗いので目を閉じたままなのかと錯覚するが、注意してみても変わらないのでそういうことでもないらしい。

（……死者が訪れる場所なのかな？）

この場所が現実ではないらしいことはなんとなくわかった。とはいえ、ここでどうしたらいいのかはわからない。永遠にこのままというわけではないだろう、そう期待するが何の変化も見られないことに恐怖を覚え始める。

（このまま……独りぼっちで居続けるの……？）

自身の肩を抱くような動きを想像し、しかし身体が存在しないことに改めて気付かされる。それがさらなる恐怖を引き寄せる。

（やだ……こんなの嫌だよっ……！）

舞を踊りたくない、生け贄になりたくない、死にたくない、もっと世界を見て回りたい――そんなことを願ってしまったことの仕打ちだとしたらと妄想し、気分が悪くなる。今さら謝ったところで、この現状を打破できるとは考えられない。ルルディは絶望しかけ、そこであるものを感じ取った。

（なに……？）

ひんやりとした静かなうねり。魔力の塊のようで、それだけではない生命の流れのような不確かなもの――それが自身の周りに満ち

ていることにルルディは気付く。暗闇であるのに、その存在を青い色として知覚できた。

『少女よ……』

声がする。正確には奇妙な音として聞き取れるのだが、ルルディにはそれが言葉として認識できた。そんな体験に戸惑っていると、声は続く。

『汝、生きることを望むか？』

「……え？」

まさかそんな問いを掛けられるとは思っておらず、ルルディは素っ頓狂な声を出す。

『汝は、生きることを望むか？』

再び同じように問われて、聞き間違えていなかったことを確信する。ルルディは応じた。

「あたし、もっと生きたい！　生きて、いろんなことを見て学びたい！　こんなところで死にたくないっ！」

必死に叫ぶ。心からの強い願いを。叶えてもらえなくたって構わない。ただその思いを、誰かに聞いてもらいたかった。

（生け贄に選ばれなかったら、お兄様のあとを追って旅をしたかった……お兄様にはお別れの言葉を言えなかったから……まだ生きていて良いのなら、会いたいよ、お兄様……）

しばしの沈黙。それがとてつもなく長く感じられたが、やがて声がした。

『……汝が願い、汝の肉体と引き換えに叶えよう。我が手足となり、命を全うせよ』

その返事の意味するところを理解できぬまま、意識が無秩序にかき乱される。ルルディは自分という存在を見失い、その境界が曖昧になっていくのを感じた。世界に散らばるあらゆる精神と感応し、そして新たなる一つのものに収束されていく。その塊が自分であると認識すると同時に、身体の感覚が戻ってくる――。

鎮魂と浄化の舞

「かはっ……」

咳込み、ルルディは目をうっすらと開ける。体中が痛い。苦痛に顔を歪め、腹部に感じる温かな魔力を目で辿った。

魔法の光、それを発している手。黒っぽい長袖の肌着にはたくましい筋肉が浮かんでいる。頭の方に視線を向ければ、黒い短髪と赤い瞳が目に入った。

「ヘイゼルさん……？」

「よお。気がついたか」

治癒魔法を掛けてくれているのがヘイゼルだとわかり、ルルディはゆっくりと上体を起こす。そこをすぐにヘイゼルが支えてくれた。

「まだ動かない方が良い。傷口が開いちまう」

「どうして……あなた……」

口元を拭った手の甲にはべったりと赤い血がくっついている。よくよく見ると、崖からわずかにはみ出た岩場には致死量相当ではないかと考えられる血だまりができていた。着ていた服も真っ赤に染まっていて重く、絞れるのではないかと思えるほどに湿っている。

「――ったく、一つずつ順番に説明してやるから、ちゃんと聞けよ」

そのように前置きを言うと、ルルディを崖にもたせかけて治癒魔法を再び発動させる。

「君は魔物に追われて神殿から逃げた。祭壇までの道に出られたまでは良かったが魔物に追いつかれ、結果、崖から落ち、瀕死の重傷を負った。――俺の想定では、魔物の襲撃の前に奉納の舞が終了し、生け贄の儀式へ移行。祭壇から落ちてきた君を俺が拾うという段取りだったんだが、敵の動きの方が見積りより早かったようだな。俺が君を見つけるのが遅かったら、危うく死なせるところだった」

焦っていたらしいことが彼の表情から読み取れる。それがなんとなくルルディには嬉しかった。

「ヘイゼルさん……なんで魔物がここへ？　今まであたし、魔物に出会ったことなんてなかったんですけど……」

この瞬間を狙って来たにしても、都合が良すぎる。ルルディは逃げながらずっと疑問に思っていたことを問うた。

「良い質問だな」

ヘイゼルは治癒魔法から別の魔法に切り替える。体力の回復を促進させるため、周囲にある生命から少しずつ生命力を奪う魔法だ。手で素早く印を結んで発動させると、ルルディの問いに答える。

「奉納される舞は、鎮魂と浄化の舞だ。それ自体が魔術になっている。十七年に一回というのは、その魔法の効力がその期間まで有効だからだ。だから、青の龍に選ばれた人間は青龍祭で舞を舞わなきゃならないんだ」

「なるほど……それであなた、あたしに舞えとおっしゃったんですね……」

きちんと説明されていれば、あんなふうに拒否することはなかったのに――ルルディは牢屋で交わした会話を思い出して小さく膨れる。

「まぁ、俺が見てしまったアレが舞の正装なら、女の子として嫌がるのはわからないでもないのだが……舞を踊らなければ、今日みたいに魔物が都市部にまで出没するようになる。よくわかっただろう？」

「あの……今からでも間に合いますか？」

傷口も癒え、体力も回復してきた。失われた血液を取り戻しきれていないので思考が遅いが、舞を舞うくらいの力はありそうだ。

まっすぐにヘイゼルを見つめると、彼は力強く頷いた。

「そのために俺がいる。ザフィリを守れるのは君だけだ」

「ありがとうございます。まずは――祭壇まで連れて行ってくれませんか？」

「了解」

ヘイゼルは短く答えると、ルルディを軽々と抱きかかえた。

「飛ぶから、しっかり掴まってろ」
「は、はい」
言われてルルディはヘイゼルの首に手を回して掴まる。いつもよりも高い場所に視界が広がっているのに緊張し、身体に伝わる彼の体温にドキドキしながらヘイゼルを信じてぴったりとくっついた。
「――エア・ラウド・フロウ！」
魔力の高まり。そしてヘイゼルの魔法が発動する。風の結界が展開し、身体が宙に浮かび上がる。そう感じた次の瞬間には上昇していた。
（これが……彼の魔法……）
様々な魔法を使いこなすヘイゼルをルルディは心から尊敬し、憧れの気持ちを持った。これだけのことを軽々と、それも魔力補助のための道具を一切用いずに行っているのだ。赤の龍がヘイゼルを選んだのも納得できる。
その上で、ルルディは誓った。
（あたしも頑張らなきゃ。ザフィリを守るために）
見覚えのある地形が視界に入る。神殿から祭壇まで延びる道だ。そこには数を数え切れないほどの魔物がひしめき合っていた。
「ずいぶんと増えたもんだな……黒の龍の本気を感じさせるぜ」
飛行位置を修正し、祭壇のある方へと軌道を変える。魔術が有効になっているのか、祭壇の手前で黒い影の魔物はうごめいていた。ヘイゼルは祭壇の設けられた広い岩場に着地すると、魔法を解いてルルディを下ろす。
「何か必要なものはあるか？」
龍の形に掘られた岩の舞台に向かうルルディに、ヘイゼルは問い掛ける。
「必要なものはないですけど……終わるまで、こっちを見ないでいてくださいませんか？」
真っ赤に染まっていた上着をするりと落とし、羽衣を羽織る。舞の準備を進めるルルディを見て、ヘイゼルは顔を赤くして魔物たち

のいる方に目をやった。
「わ、わかった。あの魔物が手を出せないように適当に払っておくよ」
「お願いします」
神殿で行われるはずだった舞。今でこそ祭りの見世物として見物客に披露されているが、本来はこうして祭壇でひっそりと行われ、生け贄の儀式まで完遂するものである。ルルディは自分の知っている正規の方法に則って舞うことにした。
魔物に狙われている状況であることを、ヘイゼルを信じてひとまず忘れる。頭の中を真っ白にし、周囲にあるあらゆる生命の存在を肌で感じ取る。そこから彼らの精神を辿り、自身と結びつけ、世界を創りし偉大なる精神を手繰り寄せる。
（龍神様、どうかあたしに力を……！）
カランカランと鳴り響く四肢に付けられた環の奏でる金属音。踏み出されるたびに、手が伸ばされるたびに、規則正しくあるいは不規則に音を響かせる。
緩やかな拍子であったのが、音が谷の向かいに反響して重なり合い、いつの間にか複雑な音を奏でる。
やがて舞台となっていた龍の像に青い光が灯り、強度を増していく。
（この町を、どうかお守りください……）
あらぶる魂を鎮め、穢れを祓う舞。ひらひらと舞う羽衣に魔力が帯びて、複雑な幾何学模様を生み出す。少女の指先に光が宿り、さらなる文字が重ねられる。
ルルディの祈りが届いたのだろうか。迫ってきていた黒い影の魔物たちが祭壇に近い位置から順番に消滅していく。ぽつり、ぽつりと一つずつ蒸発するかのように消えていったかと思うと、急速にその現象は広まっていった。

夕暮れの渓谷

（汝が願い、汝の肉体と引き換えに叶えよう。我が手足となり、命を全うせよ――か。あれが、青の龍神様だったのかしら。その使命を全うできればいいけど……）

夕陽に染められる青の龍の像。ルルディは切り立った崖に背を預けて腰を下ろし、その静かな光景を眺めていた。

（もう、ここに戻ることはないのか……見納めだと思うと、ちょっと名残惜しいわね）

強い風がルルディの髪をもてあそぶ。血が付着して塊を作り、いつものようにさらさらとは流れていかない。そんな髪を押さえ、自分の前に生まれた影に目をやった。

「――これで良かったのか？」

声を掛けてきた人物は、初めて出会ったときと同じ正装をしていた。異国の魔導師であることを示す装束は、やはり彼に似合っているとルルディは思う。

「えぇ。だって、あたしが町に戻ったりしたら、困ることになるでしょ？　生け贄は、龍神様に捧げられるためにあるんですから」

言って、ヘイゼルに笑いかけた。

鎮魂と浄化の舞を踊りきり、どうやら魔物を追い払うことに成功したらしかった。見える辺りに魔物の姿も気配もなく、正常に魔術が発動したとわかると、ルルディはヘイゼルに頼んだのだった。つまり――無事に舞を踊りきり、生け贄としての最期を全うしたと神殿に伝えてくれと。

ヘイゼルはルルディの頼みをすぐに引き受けてはくれなかった。まだ幼いルルディの感情や環境を配慮してのことだったのだろう。

それでもルルディは押し切った。なぜなら、このまま生き残ったとなればこの町の人が不安がるとわかっていたからだ。たとえ生け贄の儀式がヘイゼルの言うように間違った解釈の元で行われてきた

ことだとしても、これまでの慣習とは異なることを彼らは良しとはしない。そうなれば、家族のみんなに迷惑がかかる。生け贄として死ぬことがわかっていた以上、別れは済ませてある。この町に未練はない――ルルディはヘイゼルをそう説得し、証拠として血液のついた羽衣を手渡したのだった。

「その様子ですと、話はうまく通ったみたいですね」

ルルディはよいせと立ち上がる。舞での疲労もあって多少ふらつくが、動けないわけではない。

「混乱に乗じて誤魔化してきたような形になっちまったがな」

答えて、ヘイゼルは肩をすくめる。

「――さて、ルルディ。君はこれからどうするんだ？」

「そうですね……」

兄を追って旅に出たいと思ったルルディだが、お金も衣服も全くない状況であるのに気付いて途方に暮れる。

（死んだことにしたのはいいけど、その先のことを何にも考えてなかった……）

このままでは野垂れ死んでしまいかねないと想像し、そんな自分の残念な姿を妄想してルルディは首をぶるぶると横に振った。

「……どうした？」

ルルディの奇妙な行動にヘイゼルは眉間にしわを寄せて訝しがる。その反応を見てはっとしたルルディは、陽に染められるよりもより赤く頬を紅潮させた。

「い、いえ……その……」

言い淀み、しかしそのまま口を噤んでいても始まらないのでルルディは続ける。

「……あたし、龍の伝説を追って町を出た兄に会いたいんです。生け贄として死ぬのを避ける方法を求めて旅をしているはずで……できるなら、あたしが生きていることを、生け贄の儀式の本当の意味を伝えて安心させてやりたいんです」

「なるほどな。それは素敵な目的だ」

うんうんと頷くヘイゼル。それに対し、ルルディは俯いて血で染まったままの上着の裾をぎゅっと握った。

「で、でも……今のあたし、お金も持っていないし、服だってこんな有様で……町に顔を出すわけにも行きませんし……どうしたら……」

情けなくて涙が出そうだった。ルルディは服を掴む手が細かく震えているのを見て、自分がどれだけ後先考えずに行動してしまったのか恥じる。

「――そうだな。まずは着替えるか」

「……はい？」

涙で歪む視界。顔を上げると、ヘイゼルが何かを差し出しているのが目に入る。

「後ろ向いていてやるから、とりあえずそれを着ておけ。着替え終わったら、行くぞ」

手の甲で目をこする。ヘイゼルから手渡されたそれを拡げると、一着の裾の長い上着だった。膝が隠れるほどに長いので、着てしまえば全身を覆うことができる。

「え、あのっ……行くって、どこへ？」

彼が背を向けてしまったので、ルルディはもらった服に慌てて袖を通す。少々だぼっとしているが、着ていて変なところはない。むしろちょうど良いくらいだ。

「俺と一緒に来いよ。君一人で黒の龍と対峙する自信があるなら、無理には言わないけど」

「で、でも……」

「仕事で他の龍の祭りを訪ねて回らなきゃいけないが、君の兄貴を探す手伝いをするくらいの余裕はあるんだ。――どうする？」

（どうするって……）

わずかの間逡巡するが、こんなに良い条件はほかにはない。いや、むしろ断る理由なんてあるだろうか。

（大丈夫。この人なら、信じられる）

ルルディは、ヘイゼルの広い背に思い切って抱きついた。
「つ、ついていきます！　ってか、お供させてください！　足手まといにならないよう、精一杯頑張りますからっ！」
ルルディが大声で宣言すると、ヘイゼルはくるりと向きを変える。
「よーし。そうと決まれば、どこか水浴びができそうな場所で血を洗い落として、それから宿探しだな」
言ってにこやかに笑むと、ヘイゼルはルルディを抱き上げた。
「はひゃっ！？」
「しっかり掴まっておけ。隣町まで魔法を使って飛んで行くから。野宿は嫌だろ？」
「は、はいっ！」
首に手を回す。初めて彼と出会ったときに嗅いだ汗と埃の匂いに、何故か心臓がどくんと強く脈打つ。夕陽に照らされるヘイゼルの凛々しい横顔を見てなんだか照れてしまい、ルルディは彼の首筋に顔を埋めて見ないようにした。
（どうしちゃったんだろうな、あたし……）
魔法が展開し、空中に浮かび上がる身体。赤く染まる渓谷を小さな影が舞ったのだった。

《了》

夕暮れの渓谷（後書き）

ここまでお付き合いくださいましてありがとうございました。
少しでも楽しんでいただけましたでしょうか？

もしご意見、感想等がありましたら
どしどし書き込んでいってくださいませ。
参考にさせていただきます。

また、当作品「龍神たちの晩餐　～青の龍の物語～」は
このお話単独で完結とさせていただきますが、
続編を希望される方は作者をせっついてやってください。
今回みたいな青年視点版と少女視点版の連動をさせるかはわかりませんが、
公開・連載を検討させていただきます。

ではまたどこかでお会いできることを祈って。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4229t/

龍神たちの晩餐　～青の龍の物語～

2011年9月18日03時10分発行